

年間第十九主日

2017.8.13

マタイ 14・22-33

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高神父

先週の日曜日は主の変容の祝日に当たっていて、朗読されなかった年間第十八主日の福音は、イエスが五つのパンと二匹の魚をもって五千人を越える人々の飢えを満たしてくださった奇跡の物語でした。今日の福音は、それに続いて語られている夜の湖の場面です。このような聖書が語ることを読む時、わたしたちは戸惑いを感じます。このようなことが本当にあったのだろうかと思わざるを得ないからです。五つのパンと二匹の魚をイエスが裂き与えると、そこに居合わせた五千人を越える人々が満腹するほど食べることが出来、残りのパンくずを集めると十二のかごに一杯になったというようなことが本当にあったのだろうか。今日の福音に語られているように、イエスは本当に水の上を歩くことが出来たのだろうか、誰でも思うのではないのでしょうか。しかし、聖書はわたしたちがそのように感じるだろうということを、十分承知の上で、このようなことを語っているのです。わずかに五つのパンと二匹の魚でそれだけの人々が満腹するほど食べることができるはずがない。人間が水の上を歩くことが出来るというようなことがあるはずがないと思うのは、何もわたしたちが二十一世紀の現代人であるからではありません。これらのことが福音書に書かれた時代の人々にとっても、ここに語られていることはありえないことだったはずです。まだ暗い夜明け前の湖の上を歩いて自分たちの乗った舟に近づいてくる人影を見たとき、弟子たちは肝をつぶして、思わず幽霊だと叫んだというふうに語られています。福音書に語られている、今からおよそ二千年前のイエスの弟子たちも、現代のわたしたちと全く同じ経験の世界に生きていたのです。わたしたちの経験の世界においては、現代のわたしたちにとってだけではなく、福音書が書かれた時代の人々にとっても、ここに語られているようなことは起こりえないことなのです。だから福音書が語るこれらのことは、始めから、起こりえるはずのないことが起こった奇跡の出来事として語られているのです。

注目すべきことは、自分たちが信じるイエスが行われたこれらの信じがたい奇跡を語る福音書そのものが醸し出している大らかな雰囲気です。明らかにわたしたちの経験の世界においては起こりえないことをイエスはなされたと言語する福音書は、わたしたちに無理やりそのことを信じるように迫っているというふうには感じられません。この福音書に語られていることを信じた最初の教会の人々は、狂信的に、目を吊り上げて、わたしたちにそれを信じるように迫って

いるとは感じられないのです。今日のマタイ福音書に語られている、夜の湖で弟子たちが体験したことは、マルコ福音書とヨハネ福音書にも語られていますが、不思議なことに、これだけの驚くべきことがルカ福音書には一言も触れられていません。ルカ福音書がこの場面について触れていないのには、それなりの理由があるはずですが、それともかくとして、これだけのことを書き漏らしているルカ福音書も他の福音書と並んで新約聖書の中に収められている無造作さは驚くべきことではないかと思われまます。四つの福音書を新約聖書にまとめた教会は、辻褄を合わせようとはしていないのです。つまり、新約聖書を残した最初の教会は、今日の福音のイエスが行われた驚くべきことを語ることによって、信じられないでいるわたしたちを無理やりにイエスへの信仰へと引き込もうとはしていないのです。

今日の福音が醸し出している大らかな印象のもう一つの注目すべき点は、ここに登場するペトロの姿です。この場面でペトロのことを語っているのはマタイ福音書だけです。福音書が書かれた最初の教会の時代には、ペトロはイエスご自身によって弟子たちの頭として指名された最も重要な指導者として皆の尊敬を集める立場にあったはずですが、そのペトロについてマタイ福音書は再三に渡ってこのような失態を語っています。しかもそのマタイ福音書は、ペトロを指導者とする最初の教会の中で、信仰の拠りどころとなる書物として書き記され、受け止められているのです。イエスの弟子たちの中では、ペトロのこのような失敗が面白おかしく語りつがれていたのかも知れませんが、そしてペトロ自身も、イエスによって与えられたその職務と権威にもかかわらず、これらの話が自分の沽券に関わるとは思っていなかったのかもしれない。そうでなければ、マタイ福音書が語るこれらのペトロにまつわる記事は組織の長としての権威によって当然抹消の対象になっていたはずですが。

福音書を通して感じられる、最初の時代の教会のこのような大らかな雰囲気はどこから来るのでしょうか。自分たちが信じるイエスは水の上を歩くことも出来るお方だというような奇想天外のことを平然と書き記し、それにもかかわらず、そのような信仰に対して狂信的になって、人々にその信仰を押し付けようとはせず、しかも必要となれば、その信仰のために毅然として自分のいのちさえもささげることが出来る信仰はどこから来ているのでしょうか。自分たちの教会の中心的な権威に対しても、その信仰が決して完全ではなかったというようなことを、何のためらいもなく書き放ち、しかも、その権威のもとから離れようとはしない、したたかなバランス感覚をもった信仰は、何によって裏打ちされていたのでしょうか。

考えられることは、イエスとその弟子たちを始めとする最初の教会の人々は、

旧約聖書の信仰の伝統の中に生きていたということです。旧約聖書の信仰において神は、エジプトの地から導き出された人々のために葦の海を二つに分け、エジプト軍の手からご自分の民を救ってくださった神です。ヨルダン川の流れをせき止めて、彼らを約束の地に導き入れられた神です。その神は、モーセやエリヤやエリシャといったご自分が選ばれた者たちに、その全能の力を分け与えることが出来るお方です。その神が今やイエスにその力を与えられている、イエスを信じた弟子たちはそのように受け止めたのです。

けれども、福音書が語るイエスは、パンを増やし、水の上を歩いたイエスだけではありません。そのイエスはその時代の権力者たちの手によって十字架につけられて死んだイエスです。そこには神の存在を示すしるしは全くありません。そしてイエスに従った弟子たちはそのイエスの十字架のときに、皆イエスを見捨てて、イエスから離れてしまったのです。そのような経験を経て、弟子たちはイエスの復活を体験したのです。イエスが信じ通したイエスの父である神はイエスを見捨てられたのではないことを知ったのです。そして同時に弟子たちは、復活されたイエスによって自分たちが見捨てられていないことを知ったのです。このまさに信じがたいことを、弟子たちは復活のイエスのいのちである聖霊を注がれることによって、受け入れることが出来たのです。福音書はその聖霊によって生きた最初の教会の中で、その信仰を証するために書き記されたのです。これら全てのことが今のわたしたちの心にはどのように響くでしょうか。

科学的に実証できる経験の世界だけが全てだと信じている現代のわたしたちは、今あらゆる点で、そのような、いわゆる現実の世界に行き詰まりを感じています。そのような世界の中で、そのような日常の中で、信じることの出来る力、希望を持ち続けることの出来る力を失い、そのことによって、このわたしたちの世界を、わたしたちの日常を愛し続けるための根拠を見失っています。そのような現代人のわたしたちに、わたしたちのカトリック信者としての信仰のよりどころである聖書は、何を語ろうとしているのか心を落ち着け、耳を澄まして、聴き入りたいと思います。